

1 生徒用資料解説

ベートーヴェン「第九」交響曲演奏会（NPO法人鳴門「第九」を歌う会）

この演奏会は、1982（昭和57）年に鳴門市制施行35周年、鳴門市文化会館落成記念として開催された第1回の演奏会から始まっている。第1回の演奏会での合唱団は、377名で構成されていたが、平成25年度に開催された第32回の演奏会では、県内外から参加した合唱団は、600名を超えた。この中には、地元の鳴門市の中高生も含まれている。また、演奏会の来場者数は、毎年1,300名を超え、立ち見の観客が出るほど盛況となっている。《参考文献等：③》

ベートーヴェン「第九」交響曲演奏会全曲コンサートプログラム表紙（鳴門市ドイツ館所蔵）

このプログラムが、板東俘虜収容所において、「第九」が日本・アジアで初めて全曲演奏されたことを示す資料である。

このプログラムから、1918（大正7）年6月1日、徳島オーケストラの第2回の演奏会において、ハンゼンの指揮により「第九」が演奏されたこと、独唱と合唱を伴って演奏される第4楽章を含めた4つの楽章全てが演奏されたこと、独唱者と80名の合唱団は、全て男性によって構成されていたことがわかる。また、前日には、総練習を公開して行ったことも記されている。

なお、プログラムの表紙の挿絵には、「マックス・クリンガー作のベートーヴェンを古代神に様式化した像」が描かれている。

《引用・参考文献等：①》

※ 「第九」の「日本人による初演は、東京上野の音楽学校生による1924（大正13）年11月29日、30日」の演奏となる。

《引用・参考文献等：②》

「徳島オーケストラと合唱団」（鳴門市ドイツ館所蔵）

板東俘虜収容所には、オーケストラ、吹奏楽団、合唱団などが複数組織されていた。

「第九」を初演したのは、写真の「徳島オーケストラ（後に、『MAKオーケストラ』に名称を変更）」であった。45名で編成され、指揮は、ヘルマン・ハンゼン軍楽隊長が行った。

他にもエンゲル・オーケストラがあり、指揮者のパウル・エンゲルは、「『エンゲル音楽教室』を通じ地元青年を指導」し、エンゲルの「帰国後も徳島エンゲル楽団を組織して徳島における洋楽の草分けとなった人たち」を育成した。

なお、オーケストラで使用された楽器は、俘虜たち自身が購入したものが多いが、その他、青島（チンタオ）から携えてきたもの、救援団体の援助品、俘虜手作りのものがあった。

※ オーケストラは、板東だけでなく、久留米、名古屋にも組織されていた。

《参考文献等：①》

ベートーヴェン「第九」演奏会「世界に広がれ！とくしま歓喜の歌」プロジェクト

演奏会の主催は、徳島県である。平成27年度の第1回演奏会は、1月30日の日曜日に開催され、県立中学校の生徒をはじめ、徳島県内外から2000名近く合唱団が参加した。

2 参考文献等

《主なもの》

- ①：「第九」と日本出合いの歴史（ニコレ・ケンプケン著 2011年 彩流社）
- ②：「第九」の里 ドイツ村（林 啓介著 1993年 井上書房）
- ③：NPO法人鳴門「第九」を歌う会HP（<http://www.naruto-9.com/>）

《その他》

- ：鉄条網の中の四年半-板東俘虜収容所詩画集-（ヴィリームツェルゼー 1979年 井上書房）
- ：鳴門市史 中巻（鳴門市編 1982年）
- ：板東ドイツ人俘虜物語（林 啓介他著 1982年 海鳴社）
- ：板東俘虜収容所物語（棟田 博 2006年 光人社）
- ：徳島の文化財（徳島県教育委員会/徳島新聞社 2008年 徳島新聞社）
- ：板東俘虜収容所の全貌-所長松江豊寿のめざしたもの-（田村一郎 2010年 朔北社）
- ：「第九」と日本 出合いの歴史（ニコレ・ケンプケン、大沼幸雄ほか、2011年彩流社）
- ：板東俘虜収容所跡調査報告書-鳴門市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 報告書-（鳴門市教育委員会 2012年）
- ：鳴門市公式サイト 「なると第九」
（<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/index.html>）
- ：鳴門市ドイツ館HP
（<http://doitsukan.com>）

3 ねらい

徳島県鳴門市が、ベートーヴェン「第九」の「アジア・日本初演の地」となったことに関心をもち、その背景や経緯などについて理解を深める。

4 教材選定の理由

「楽聖」とも呼ばれるベートーヴェンは、楽曲が音楽科の授業で教材として扱われるだけでなく、聴力を失った後もその困難を乗り越え、数々の傑作を生み出した生涯を描いた伝記をとおして、多くの人に知られているドイツの偉大な作曲家である。「交響曲第九番（以下、「第九」）」は、ベートーヴェンが作曲した最後の交響曲で、現在、日本各地で、毎年200回を超える演奏会が開かれているなど、有名な楽曲の1つと言えるだろう。

しかし、この「第九」の「日本初演の地」が徳島県の鳴門市であることは、あまり知られていない。

この教材では、「第九」が鳴門市で演奏された歴史的な経緯や背景に焦点を当てている。第一次世界大戦下の俘虜収容所という厳しい制限が課せられるべき場所で、人道的で寛容な収容所の運営がなされ、俘虜たちの自主的な活動が認められていたこと、その中で「第九」の演奏が日本で初めて演奏されたことについて理解していくことをねらいとした。また、鳴門に「『第九』初演の地」という「宝物」を残してくれた、ドイツ兵俘虜の人たちと、地域の人々との交流のシンボルとして、現在の「第九」演奏会が受け継がれていることに気づかせたい。そして、こうした学習活動を行うことは、郷土の歴史への理解やふるさと徳島に対する誇りと愛着を深めることに資すると考え、本教材を選定した。

5 学習の流れ（例）

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	1 本文の「鳴門市の『第九』は6月開催」を読み、ベートーヴェン「第九」について知っていることや、演奏会の印象について発表する。	○教材の資料の他、「第九」の合唱部分について、訳詞の資料を配ったり、演奏をCDなどで聞かせて、学習意欲を喚起する。
展開	2 本文の「徳島オーケストラ」をもとに、「徳島俘虜収容所」及び「板東俘虜収容所」内での音楽活動を通して、鳴門で「第九」が演奏される背景を理解する。	○「板東俘虜収容所」について知っていることを発表させ、松江所長による人道的な運営が行われたことに気づかせる。 ○収容所内での俘虜の兵士たちの生活の様子や思いについても想像させる。
	3 本文「『第九』アジア初演」から、本公演を開催した収容所の人々の心情について話し合う。	○俘虜収容所という閉鎖的な場での本格的なオーケストラの演奏が如何に困難であったか、にもかかわらずその実現に全力で取り組んだことを理解させる。
	4 「第九」を通じた鳴門市とドイツとの交流の発展について理解する。	○鳴門市で「第九」演奏会が開催された目的や、その後の市民の取り組みなどを様々な資料を通して理解させる。
結論	5 本時のまとめとをする。	○ワークシートを活用し、自己評価を行わせるとともに、授業後の感想を発表させる。